
024-01 終末期がん患者に対する在宅リハビリテーションでの関わり

藤野 慎平

株式会社 アール・ケア

【はじめに】今回病名のみで、余命を告知されていない症例を担当する機会を得た。余命を知っていたのはご家族のみである。少しでも長くご本人及びご家族の望まれる在宅生活を送れるよう、状態の変化に細心の注意を払いつつ、段階的な負荷設定にて理学療法を行った。結果として身体機能の向上が見られ、ご本人の疾患に対する不安は軽減し、目標を持った有意義な日々を過ごす事が出来た症例について報告する。【症例紹介】年齢：70代 性別：男性 要介護：3 性格：几帳面、高い運動意欲 現病歴：芽球性形質細胞様樹状細胞性腫瘍【取り組み内容】元来、活動的であり運動意欲が高く几帳面な性格。自身の身体の変化に非常に敏感な為、疲労感に合わせた運動負荷設定指導をご家族同席のもと行い、運動習慣の確立を目指した。運動習慣を確立し、それを継続出来る事が精神的不安感の軽減にも繋がると考えた。【まとめ】元来、運動意欲が高かった事もあり、本人に合わせた負荷設定にて運動習慣を確立する事が出来た。本症例のように人生の最後が近づいている状況であっても、細かな状態観察と適切な運動負荷設定を行う事で、身体機能の向上が得られ、活動範囲の拡大を図る事が出来た。その結果、人生の最後が近づいた状況の中でも、ご本人・ご家族とも有意義な日々を過ごす事が出来たのではないかと推察する。